

最高のプレゼント

立教女学院短期大学幼児教育科准教授
附属幼児教育研究所天使園園長

鈴木 隆

本学では、一年次後期に「教育実習Ⅰ」を開講し、学生が自らの選択として教職課程を履修することの意義や重要性、責任を持って履修する覚悟を固める機会としている。二年次に通年で開講する「教育実習Ⅱ」は、それに引き続き事前指導、本実習、事後指導、就職への動機付け、職業意識の確立などに当てている。教職課程の中では極めて重要な科目と位置付けている。

その「教育実習Ⅱ」の最後の締めくくり、いわば、一年半の間継続してきた教職の学びの結びを北島氏にお願いしているのである。それはなぜか、ひとことではいえないが北島氏の話が面白いからである。「面白い」とは、北島氏もいうように「目の前が開け、光が射し込み、心晴れ晴れとするさま」であり、まさに氏の話は面白いのである。しかもその面白さは、たんに楽しいとか、笑えるという面白さではなく、興味深く、意味深い面白さ、そして保育者にとって意味のある面白さなのである。

そこには、北島尚志という人物のひととなりがにじみ出ているのであろう。もちろん話す技術、間の取り方、話の展開のしかたなどもあるが、北島氏の人に対する熱き思いや、子どもに対する熱烈な愛情である。さらに、単純に物事を面白がる気持ち、純粹さであると私は受け止めている。その北島氏の思いが、話のそこそこに、まさににじみ出るように感じられるので、「面白い」のだと思う。個人的には、世の中の保育者と名のつくすべての人に、北島氏の話を一度は聞いて欲しいと思っている。それだけの価値がある。そう思って、この北島氏の話を書面に残そうと試みたのが立教女学院短期大学紀要第38号(二〇〇六)であった。本書はそこに端を発している。

さて、多少乱暴になるかもしれないが、私はどんな方法で保育をするかということよりも、その方法でいかに保育するかということの方が重要だと私は考えている。北島氏の展開する論は、このいかに保育するかということについての示唆を与えてくれるものである。子どもが、子どもとして、子どもの時間を生きること。そこに周囲の大人はどんな手助けができるのか。本当に大事なことは何なのか。我々が保育者として子どもの前に立つとき、何を大切にすべきなのか。こうした事柄についての重要な提案が含まれているのである。まして現代のこの、子どもが子どもとして生きにくい時代、子どもが健やかにのびのびと生きにくい時代にあつて、この主張は、より一層重要性を増してきている。普通に生活しては失われてしまいそうな、本来子どもにとつては当たり前であつたことを、子どもに取り戻そうとする視点がそこにはある。私などは、氏の話聞く度に、うーんとうなりながら、自分を振り返つて反省せざるを得なくなるのである。

本学の教職課程を履修して卒業していく学生は、大変幸せな学生である。最後の最後にもう一度、保育つて何だろう、子どもつて何だろう、保育者つて何だろうという極めて基本的であり、なおかつ永遠のテーマでもある課題を、北島氏の話の中から感じ取り、考えることができるのである。いささか手前味噌ではあるが、我々教育実習担当教員から、卒業していく学生、保育現場に足を踏み入れようとしている学生への、最高のプレゼントがそこにあると考えている。